

- 1 射水市立大門小学校（発表時 大門町立浅井小学校）
- 2 みちしば特集号「生きる力といのちと死」掲載
- 3 「僕らのナマズが死んじゃった」

## 総合的な学習と関連させた道徳授業（高学年 2 時間）

### 僕らのナマズが死んじゃった

【いのちを見つめ直す】

ミニ水族館の運営を通して、生き物との触れ合いやいのちを直接見つめる場を繰り返し設定することで、かけがえのないいのちやいのちのつながりについて学び考えることができるのではないかと考えた。また、それを通して、子ども達がそれぞれの生き方について見つめ直す契機とすることができるのではないかと考えた。

横たわるナマズを身じろぎもせず見つめる子供たちの姿は、いのちとのふれあいが体験をより印象深く意味あるものにすることを私に教えてくれた。



#### 1 実践のあらまし

ナマズとのふれあいと別れを契機に自己を厳しく見つめていく子供たち

##### (1) ナマズとの出会い

6月のある朝、肥料袋に入れられて体長60cmあまりの大ナマズが地域の人によって届けられた。近くの用水の改修工事の際につかまえられたらしい。浅井小学校では、井戸水を利用して18個の水槽でトミヨなどおよそ25種類の庄川水系の淡水魚を飼育している。水族館の管理は、毎年5年生が担当することになっている。届けられたナマズをみて、真っ先にT児が担当したいと名乗りをあげた。

##### (2) 餌付けまでの苦労と喜び

捕獲された時に傷ついたらしく弱っているナマズにエサを食べさせようとT児はいろいろと試した。しかし、人工エサには見向きもしない。ようやくミミズを初めてパクッと食べた。すぐに友達や先生に知らせるなど、T児の喜びは大きかった。体調が回復し、生餌をうれしそうに食べるナマズにいとおしさがわいていった。

##### (3) ナマズとのかかわりの深まり

7月に入り、ナマズの元気がなくなった。T児は、本で調べたり、専門家に聞いたりして、その原因を必死に調べた。腹の膨らみに気付き、卵ならオスを入れてやらねばと、友だちにも呼びかけて一生懸命オスのナマズを近くの川で探した。しかし、オスは簡単には見つからず、結局腹はいつしかしぼんでいった。

##### (4) ナマズの死

9月4日、ナマズがとうとう死んだ。T児は、クラスみんなが認める魚博士である。知識が豊富でいつも熱心だった。大切に育ててきたナマズの死に直面したT児は、深く動揺し、自分の責任と受け止めていた。クラス全体の子供たちにいのちの意味を見つめ直し、生き物のいのちを預かることの重さを実感しているT児の見方・考え方を広められると考え、その日の午後、すぐに話合いの時間を設定した。

（授業記録）

T1 : Tさんのナマズは、幸せだったのか？

C1 : 毎日、一生懸命に世話をするTさんに飼われて、ナマズは幸せだったと思う。

T2 : Tさん自身はどのように思う？

T児 : 朝からナマズの体調が変だったから休み時間ごとに水槽の前にいたんだ。でも、用事があって水槽からちょっと目をはなしたすきにナマズが死んでしまった。死ぬ時に、一緒に横にいてやりたかった。ナマズの死をしっかりと見とどけてやりたかった。大切に育ててきたから、いなくなってとても悲しい。

C2 : ナマズは、用水の改修工事で居場所が無くなり、浅井小にやってきた。もしそのままだったら6月には死んでいたかもしれない。だから、ナマズは熱心に育ててくれたTさんに「ありがとう。」と感謝していると思う。

C3 : わたしは、ナマズを持ってこられた地域の方は、とてもやさしい人だと思う。ナマズが死なないようにと浅井小の水槽に持ってこられたのだから。

C4 : わたしは、死ぬ前に、ナマズは川で泳ぎたかっただろうと思う。狭い水槽の中で過ごしていたから、せめて死ぬ前くらい---

C5 : ナマズを川に帰してあげた時、ひっくり返ったナマズの白いお腹が見えたんだ。その時、前の卵のことを思い出した。お腹に卵がいるかもしれないって、みんなでオスを捕まえて子供を産ませてあげようとしたけれど、オスを捕まえることができずに卵はしぼんでしまった。なんだか、かわいそうになった。

C6 : ナマズは卵を産みたかったと思う。とてもくやしかったと思う。

C7 : もしあの時、卵が産まれていれば生命が連続していたかもしれないのに。

T3 : Tさんは、ナマズの死から何を学んだ？

T児 : 体調が悪かったのに何もしてやることができなかった。魚に関する知識がもっとあれば、ナマズは死なずに済んだかもしれない。自分のミスで死んだから、他の魚では、同じ失敗を繰り返したくない。

#### (5) ナマズの死を通して、生きることの喜びを見つめていく子供たち

- ・ 生きることを時間的な視点からとらえ、少しでも生を長らえることができたことの幸せを強調する C2, C3
- ・ 生きることを質的な視点からとらえ、少しでもものびのびと自由に生を楽しむことの幸せを強調する C4
- ・ 生きることをその使命という視点からとらえ、命をつなげる幸せを強調する C5, C6, C7

このように子供たちは口々に、「ナマズはTさんに飼われて幸せだった」と生きることの喜びを多様な視点で語っている。

#### (6) ナマズの死を通して、自分のかかわり方を見つめていくT児

一方、T児の「見とどけてやりたかった」という発言からは、愛情を注ぐ対象をもてた喜びとそれを失った悲しみがうかがえる。また、無知の罪ということにも思いをめぐらせている。

## 2 実践からみえてきたこと

大切なナマズを失ったT児の嘆き悲しむ姿と感情をタイムリーに取り上げたことで、他の子供たちの心は大きく揺さぶられ、自然にT児の心に寄りそう発言が続いた。そして、自分にはないT児の魚への強い思いや考え方・感じ方を学んでいった。ただ体験させるだけでなく、体験に伴う感情に着目したからこそ、いのちやいのちのつながりについて考えを深めていったのではないかと。また、T児には、「豊富な知識」「対象とかかわった時間」「仲間からの承認」がある。体験活動では、この3点を大切に支援することで、対象とのかかわりはより深まり、意欲につながる。責任を持って熱心に育てたからこそ、いとおしさが増し、自分が背負っていた命の重さや大きさにも気付いたと言えよう。

(富山・いのちの教育研究会定例会 平成 15 年 12 月 14 日発表)  
みちしば特集号「生きる力といのちと死」 日本文教出版 / 秀学社 06 年 3 月  
射水市立大門小学校 (発表時 射水市立浅井小学校) 教諭 高木 司